

書評

G. D. H. コール『社会理論々集』

G. D. H. Cole: Essays in Social Theory,

London, Macmillan & Co. Ltd., 1950.

8vo., vii + 252p.

木村正身

かつて大正末期から昭和のはじめにかけて、コールがマキエヴァやペンティやオレイジやS・G・ホブスンやウィリアム・メラー、またR・H・トニーなどとともに多元的・機能主義的・社会論者、またギルド社会主義者としてわがくに紹介されてから、はや三十年にちかい星霜がすぎている。

ところでそのばあい紹介されたコールは、ほとんどもっぱら社会学者ないしは国家論者としてのコールであった。『団体は機能にすぎだつ』という高田博士のコール批判がわがくにのおおくの社会学者たちによってそのまま信奉され、さらにコールにおける「共同体」と「個人」とのあいだにはたがいに矛盾がある」と指摘されるにおよび、コールは「きよくイギリスにおける第二流の思想家にすぎない」という解釈が普及したとき、あとにはただたんにデスクリプティヴ・ライターとしてのコールのみがのこされてしまい、そこでひとびとばコール批判をおえ

たものとかんがえた。

しかしひとびとはこのような社会学に満足することによって、じつはコールだけでなくイギリス社会思想、いなイギリス社会そのもの、の特殊な系譜と構造とをわすれていたのではなからうか（このような傾向はコール評価にかぎ。たことではない）。たんに社会学者・国家論者としてのコールだけではなく、かえつてデスクリプティヴな仕事のなかにひろく社会思想家、さらにイギリス労働運動のイデオログとして、そしてまたフエビアン社会主義の消長史における一巨像としてのかれをふかく理解しようとするころみは、わがくににおいてはまだまだほとんど手をつけられていないといつてよい。たとえば一方において種々の事情からマックス・ペアの「イギリス社会主義史」やウェップ夫妻の「労働組合運動史」の邦訳が比較的はやくからでているのにたいし、それらとならんでイギリス社会運動史の教科書として定評のあるコールの「イギリス労働運動小史」はやつとさいきんに決定訳がだされはじめたばかりにすぎない。だがむしろコールの本領はこの方面にあつたといえるのではないか。コールがイギリス労働運動のイデオログとして理論的にも実践的にも活動しはじめたのは第一次大戦前後からであるが、その後不断に労働者のために筆勢をゆるめず、第二次戦後も老いてますます円熟多作、ひとびとはついにラスキ評価とならんでコール再評価を準備しなければならなくなりつゝあるのではないか。実際ラスキ近いたあと、いまやコールは名実ともに

労働党のもっとも有力な論客の地位にあってゐる。他方においてコールの母校でもあり現在の在職校でもあるオクスフォード大学における特有の総合的な社会科学研究的雰囲気は、かれを専門的な「経済学」者たらしめなかつたのであるが（かれは「経済学部」の独立に反対し、パレット流の抽象的数理経済学の衰退とこれにかわる統計的・応用的研究の擡頭とをよるこぶ）、このオクスフォード的伝統は、ケムブリジやロンドン・スクールの経済学中心のゆきかたがはやくからわが学界人に容易に理解されたのとは反対に、きわめてわれわれにとりつきにくいものであり、ひとびとはコール理解のためにさしあたって必要なのは「モダン・グレイツ」（哲学・政治学・経済学の三学科を綜合したオナア・コース）についての理解をすら、いまままでおこたってきたといわなければならぬ。

もちろんこのようなコール評価史は、わがくにおける労働運動そのものの不当にゆがめられたこれまでの発展、またそれにおうじてわがくにの社会学者たちが内外労働運動にたいして故意に眼を閉じ、抽象的な国家理論の形而上学化に奉仕してきたという事実、意味ぶかく対応するものといわなければならぬであらう。

さてそれではコールの社会理論はかれの社会主義的実践意欲とどのようにむすびついてきているのであろうか。またイギリス労働党の「墮落」に照応し、あるいはフェビアン協会の理念のブルジョア化、「調停派社会主義」化につれて、コール自身の

G. D. H. コール『社会理論文集』

理論的立場になんらかの変化があつたであらうか。それについての解答はコール自身のデスクリプティヴな、またヴォリユミナスな、しかし、あまりにヴォリユミナスな諸著作のうちに、不斷にあたえられてきているはずではあるが、しかしかれの論理の集約をもとめるひとびとはしげつた獨々に視界をさえぎられて、ともすれば森のおおきさや形状をつかみかたい。そういふばあい、あたかもコール自身がオーギュスト・コントの浩かな著作群の要粹を一冊の簡潔な密物（「実証精神論」）においてみいだしたように、ひとびとはコールの多年の広範囲にわたる累索の結晶を、本論文集においてみいだすことができるといつてよい。それは一面では経済理論を同じ年に出た「社会主義経済学」（名和・小川共訳近刊）にゆずっているからかれのケインズやシュムペーターにたいする批判をみることができぬし、また論文集である点で一九一七年の「社会理論」にくらべて雑然さをまねがれないが、他面理論的にいつてもいまや一個の老成した社会思想家として視野のひろさをくわえ、社会科学ないし社会政策論——かれの言葉にしたがえば「ソシヤル理論」——の方法にかんして明瞭な立場をしめすにいたつているともに、あくまですぎたつた自己の思想への反省をおこらぬい著者が、よむひとにおもわず贅をたださせるような、（学問にたいするまた民衆にたいする）わかわかしい熱情を、ほとばしらせているという点でも、まさにコールの面目をしるうえに好箇の文献たるをうしなわぬものといえるであらう。

しかし筆者が本書をここにとりあげるさしあつてのモメントは、コールの思想体系における本書の地位の規定にあるのではなく、むしろ一般にイギリス社会主義の本領・良心が現在のところコールの思想にもっともヴィヴィッドなかたちでしめられているということ、そしてそれはたとえどのように表面ではマルクス主義にたいして組織に批判的であろうとも、その実践意欲においてきわめて健全で積極的なものをもっているということを指摘することにある。たとえばひとは、コールの他の書物の中で、ブドウヤード・キプリングやチャールズ・ディルカやバーナード・ショーにたいするかれの峻烈な批判——イギリス帝国主義者としてのかれらの位置づけ——のうちに、また「講壇派」化したフェビアンたちにたいするかれの容赦ない弾劾のうち、イギリス社会主義の良心の強靱なさげびをききとることができよう(たとえ、レイモンド・ポストゲイトと共著の「ザ・コモン・ピープル」初版一九三八年、改訂版一九四六年、参照)。筆者の本論文にたいするおもな期待は、そういうコールの実践意欲とかれの社会学理論体系とが本書においてどのように集約的に統一されているか、というところにあつた。

二

ごく簡単に本書の構成をみておこう。本書は一九四一年から四九年にわたる九年間にわたる十六箇の論文(講演録をふくむ)の集成で、簡潔な序文がついている。各論文の見出しをしめすと、——(1)社会政治理論の領域と方法。(2)二十世紀の

社会学と政治学。(3)イギリス諸大学における社会科学の教導。

(4)教育の目的。(5)社会道徳論。(6)民主主義と巨大国家との対決。(7)民主主義の本質。(8)ルソーの政治理論。(9)フランス人権宣言論。(10)西洋文明と個人の権利。(11)オーギュスト・コント。

(12)一八四八年の共産党宣言。(13)ヴィクトリア時代人の理想と信仰。(14)国民性の要請点。(15)公務改革論。(16)わたくしの前提。

このうち(2)・(3)・(6)は諸雑誌に発表したもの。(15)は一九四三年十二月のフェビアン協会における講演録での中に同協会編「計画は民主的たりうるか」、一九四四年、に収録されたもの。

(5)・(7)・(14)の三つはコールの自著「ヨーロッパおよびロシアと将来」、一九四一年、からの再録。(1)・(8)・(9)・(11)・(12)の五つは

オクスフォード大学での公開講演録。このうちとくに(1)は同大学チチエル講座「社会政治理論」の就任講義であり、あとの四つは今まで未公開だったもの。(4)は一九四二年に同大学ナフィールド・カレッジで組織された「戦後再建調査会」のためかかれ、私的に発表されていたが今回初公開。(10)・(13)は一九四八年のラジオ放送にもとづくもの。最後の(16)は「戦後世界への知識人の手びき」(初版一九四七年)の一般序言からの再刷である。以上でわかるように、本書の編集順序は大體四群にわかれ、(1)―(4)は社会科学一般に关する方法的反省であり、(5)―(7)は民主主義と近代巨大社会との適応の問題がとりあつかわれ、(8)―(13)

は十八・九世紀の社会・政治理論の展開の分析にかんするものであり、(14)―(15)は以上をおぎなう意味での国民性・公務員の二問題についての考察である。なお最後に(16)はコールの社会理論のみならずかれの思索一般の前提となる基本前提十二箇の解説で、事實上第一群に属し、(1)とともに全体のしめくりとなっている。『各論文はそれぞれ独立したものであって、それらをつらねて一巻の書とするにたる口実などはない。しかしながらそれらに外観上或る種の統一があることは、巻頭論文および巻末の「綱領」の光にてらしてそれらをおよみ下さる方々の看取されるであろうとおもう。』(本書序文)。

ところで筆者はこれらのユニーク・豊富かつ多岐にわたる諸論文のすべてをここにくわしく紹介する余裕もないし、その資格もない。教育論や公務改革論——とくに後者は官公庁が全然腐敗していかないばあいにもなお問題となるころのスピードとイニシヤテイヴの欠如を、あたらしい社会政策・経済計画の前進のためにどのように改革すべきかを論じたもので、社会主義とビュロクラシーとの区別確立のためにきわめて注目すべき論文であるが——にかんすることはさしあたりまったく抜きにして、ここでは社会Ⅱ経済思想史ないし社会政策論を勉強しているものにとりて、さきほどのべたような観点から本書においてとくに注意をひかれる諸論点を整理してゆくことにする。

三

G・D・H・コール『社会理論々集』

まずなによりも本書をひもどくものの胸を痛烈にうつものは、コールの社会主義者としての学問と実践との一体化の主張の真摯なたかいひびきである。『一部の読者はわたくしがながら社会主義運動・学究生活の双方にふかく関係してきていることをご存じであろう。わたくしは社会主義的意見をもつてはいるがしかし職業としては教授著作に従事し、実際政治にはしたがったことのないところの、一介の大学教師にすぎない。代議士立候補は一九四五年自分の大学のために余儀なくたされた以外、やったことはないし、その折は当選しなかつたのでたいへん助かったのである。また労働党会議の委員になろうとしたこともないし、政界の領袖の地位をもとめたこともない。そういう素質も趣味も性来欠いているのである。わたくしはしばしばつよい意見をのべたこともあり、また、教師が自分の意見をつよくのべたりならかの政治問題にかんするつよい見解をもっていることを世に知られたりするのは妥当でないといふかんがえかた——これは一般に「進歩的」な所見のひとびとにかぎって問題にされるのだが——には、つねに精一杯反抗してきただのである。わたくしは教師として、たとえ他人が賛成しようとしまいと、自分が真理だと信ずるところをおしえるという権利を主張する。ただし、わたくしがいやしくもおしえようと欲する場合、わたくしは自分自身の弱点をけってかくしたり、政治的便宜をかながえるあまり観察能力のかぎりをつくして真理をのべることから逸脱したりしてはならない。それとはべつ

のことをおしえるのはわたくしの心魂のすべてをつくさないので、心魂の最善をつくさないで、仕事をするのにあまんずるということになるであろう。万一わたくしのかんがえの須要部分をかくしてしまふほどにいつわった状態で学生に臨まなければならぬとしたら、わたくしはどうして立派な教師たることを期しようか。』(p. 245) これはじつになんと烈々の気魄であろうか。——この点をさらにユールの社会理論に即しても第一論文によりながながめてみよう。

いったいユールはオクスフォード大学で一九四五年いろいろ「社会政治理論」(Social and Political Theory)という名称の講義を担当しているが、この名のもとにこれは「哲学」と「科学」とのあいだにあるものとしての「理論」の仕事は社会的・政治的事象についておこなおうとする。『社会的・政治的事象の世界およびこの世界に属する諸概念を、教授として、考察するのがわたくしの仕事である。』(p. 1) その場合「社会的」・「政治的」とはそれぞれどういうことか。まず「社会的」理論の意義については。

「社会的」という語は「社会」の形容詞であるが、「社会」とは人間諸関係が純粋に個人的・私的領域を超えて諸共同体のまた実現の過程にある一大綜合人類共同体の生活、の要素となるにいたるようなばあい、このような人間諸関係の錯雑した全体のことにはかならない。その場合「社会」の効果的な構造の部分をかたちづくるものはすべて「制度」として規定される。任意の私的・個人的人間関係はそれが「制度化」されているか

いなくかによって、同時に「社会的」たりうるかいなかがテストせられる。ユールにあってはこのような制度にはたとえば議会・国教会およびその他の諸派教会・労働組合・協同組合・政党・大学・その地種々の職業団体などのように「結社」なものもあれば、一夫一妻制・相続自由・結社自由・出版自由・君主制・銀行休日制度・道路取締規制・金本位制などのごとく「非人格的」なものもふくめられる。そしてむしろそれらは歴史とともに消長隆替してゆく。

ところでこのような「制度」の研究は「社会人類学者」もこのころみるところであるが、しかし社会人類学者は職業的「科学」者であって、そのかぎりでは是非善悪の判断をおこなわない。これにたいして「社会理論家」は、まずおなじような事実研究を過去の社会諸理論の歴史家・記録者としておこなうかぎり、社会人類学者とことなるところはない。しかしこれはかれの副次的作業にすぎず、かれには第一になすべき仕事がかれにされている。それは現在の情勢における社会的行動の実験的指針として表面的な論理を超えて、そのような社会諸思想のうちどれが大いなる思想模型であるかを他人にしめすということ、これである。これこそ過去のすべての偉大な社会理論家たちがこころみたところであり、ユールみずからまたこれをこころみつた。これはかれが終始、市井人としてのみならず理論家としてもまた価値判断をおこなわなければならぬということにほかならない。——こうしてユールはここではマックス・ウェーバーの

名前すらださないで没価値論にまっこうから痛烈な反対を表明している。このような方法論議はイギリス人としてはめずらしい。コールはけっしてウェーバーを譲らないのではない。しかしともかくコールにとつては、トニーに評価されたウェーバー（資本主義精神論）以外に、まなぶにたるウェーバーは存在しないのである。

それでは価値判断の基準とすべき善悪の観念とはどのようなものか。コールによれば、ものごとの善悪は二重の構造をもつ。すなわちコールは第五論文において、善悪に道德的なものと合理的なもの二種があることを指摘する。後者についてはひとはそれが歴史的社会的事情にもとづいて根本的に変遷する様相を理性なしにコモン・センスにもとづいて客観的に判定することがむろん可能である（たとえばレスセ・フェールが善いか悪いか）（「いわば技術的価値判断の是認」）。ところで道德的善悪もまた時代とともに変つてゆく（例えば人格・言論・結社等の自由抑制が善いか悪いか。侵略戦争が善いか悪いか等）。なるほどそれは道德観そのものの隆替にもとづくのだが、しかしこの隆替にもかかわらず真の道德観は一旦確立されたら永続する。なぜなら真の道德観は静的・孤立的でなくて弾力的・累積的であるからである。それは曲ることがあっても、折れない。——この議論のすすめかたや「制度」概念のつかみかたはソリストアイン・ヴェブレンによつて代表されるアメリカのインスティテューションナリストたちのそれに似ていることに、ひとは注意すべ

きであろう。——こうして累積された成果こそ、道德的善悪の基準として客観的に確認されうるのであつて、「道德的価値判断の是認」、第一論文によればその諸基準はつぎのとおりである。第一に肉体的基準としては健康、第二に知的基準としては知識欲、真理・合理性・寛容の尊重であり、第三に美的基準としては感受性・審美性・創意であり、第四に行為の基準として創造的才能・自制、また他人に処する態度としては快活・友愛・協調・配慮・親切があげられる。第五に社会そのもの——社会的行動をつうじて個人のために実現さるべき善——の基準としては、民主主義・自由・社会保障があげられる。以上は第一論文に示される諸基準であるが、更に最終論文ではそれらを一層具体的にのべた十二箇の前提が展開されている（(1)生活水準の向上(2)人格的・政治的自由。(3)個人・政府・団体は道德的につくすべきをつくさすに必然悪的社會行動に出でることをゆるされぬ。(4)個人の社會奉仕義務。すなわち十分に一日をはたらき、自己の能力を発揮し、他人の妨げでなく助けとなること。(5)これをはたすかぎりでの自己のみちをあゆむの權利。(6)共通道德——親切・寛容・人格尊重・平等・それらを守る熱意——の確保。(7)同胞愛。(8)真理に忠実。(9)言論の自由。(10)結社の自由。(ただし(9)、(10)は共通道德や言論自由そのものに反対するものであつてはならない。(11)意志の自由。つまり歴史は予定されているのではなく、ひとは自然的、伝統的環境と自分の知識・能力とにおうして機会を利用しうる。(12)以上の諸原則をまも

れるようなたらしい「ヴィジョン」の養成とそのための教育。」
 これらは第五論文によれば直接には西欧道徳観の成果である。
 ヨーロッパ文明は、資本主義文明としての幾多の弊害をもつに
 かかわらず、この貴重な遺産をのこした。ソ同盟ないしマルク
 ス主義者たちが、西欧諸国の資本主義批判に急なあまり、この
 西欧道徳基準までも「階級道徳」として否定し去ろうとしたの
 はブランドである。ソ同盟民衆と西欧諸国の民衆との協調共
 存はこのような道徳基準にたつことによつてのみ可能だし、ま
 た必然なのだ。(pp. 83—88)

ところでニールは以上のようなものも善をさらに統一す
 るようなならんかの単一のユートピア的善をかんがえるのでは
 なく、それらをおくまで多元的な、互いに対立しうる、しかし
 また種々に組みあわせていろいろの模型をつくりうるものとし
 て把握する。ひとはまさにここにニールにおける個人主義と共
 同体理念との両立の謎の鍵をみいだす。あらゆる社会は一定に
 制限された諸価値の模型をしめすだけであつて、あらゆる諸模
 型にふくまれる諸善のすべてを一の社会に押しこめということ
 はできない。またどのような社会も全然諸善ばかりから成ると
 いうわけにはいかなない。なぜならあらゆる模型は諸善の相互抗
 争するかぎりそこに不便と錯雜した諸善をもたらすからであ
 る。』(p. 8)とついでこのような諸善の組合せ模型のうちどの
 模型をえらぶかは、おのずから個人的かつ歴史的なことがらで
 あるから、たとえばわたくしの選択はヒトラーのそれとまった

くことなるし、今日については中国人やインド人のそれと
 もことなるであろう。あくまでそれはわたくしのリストである。
 しかしわたくしとおなじ社会または似た社会に住むひとびとの
 多数にとつても、このリストは大たいにおいて満足すべきもの
 だろうと思ふ、とイギリス人ニールはいふ。だがそのばあい、
 一個人の価値判断を他人に勧奨するゆえんはどこにあるか。か
 れは相互共存のうえにたつ最大幸福・最小苦痛という功利主義
 的論拠をあげるが、しかしそれはなぜかとたずねられたばあい
 もはや議論のしようもないという。生物学的生存法則にまで話
 をおとすわけにはゆかないというニールに、まづわれわれは二
 十世紀のベンタマイトの風貌を看取することができるのだが、
 しかしさらにその主張の底にある個人主義をわれわれは見おと
 すわけにはいかない。

こうして「社会理論」は本質的に規範的研究であり、その点
 において倫理学が単に技術的であるのとことなつてゐるし、心
 理学や社会学がたんに科学的(事実研究)であるにとどまつて
 価値判断をおこなわないのともことなる。もっとも、さいきん
 発達した社会心理学は「団体行動」(グループ・アクション)を研究す
 るものの「行動」(「フィルタード・アクション」)を研究す
 る点で——グレイアム・ワラスやロバート・マイケルズやオス
 トロゴルスキーなどの業績がそれであるが——社会理論にたい
 へん親近性をもつが、しかしあくまで社会理論のデータを供す
 るものにはすぎない。

四

コールにおける「政治的」なものとはなにか。「政治的」を「近代国家的」のシノニムと解する伝統をもつオクスフォード、いなイギリス学界一般にあきたりないかれは、いきおい「政治的」なものにたいしてもあきたりない。だからかれは「政治理論」家たるよりむしろ「社会理論」家たろうと欲する。

なるほどわれわれの考える「国家」は社会関係における中心理念として最初到達した。だがそのような「国家」の誕生は近代にはいつてからのことにすぎず、しばしば誤解されるにもかかわらず古代ギリシヤの「ポリス」はこのような国家ではなない。中世にも今日の意味の「国家」は存在しなかった。その場合の社会関係の中心のひとつは教会であり、他は「国家」でも「帝王」でもなく、もつと錯雑した世俗的権力をあらわす諸制度の複合物であった。後者を集中せしめる中心としてようやく近代国家が出現し、そこに教会对国家の理論的・実践的な斗争のうち、教会は腐朽衰退してゆく。こうしてまずマキャヴェルリ、ついでホッブズにおいて「政治理論」はすづれて「国家理論」としての形態をととのえたのである。すなわち国民主義の理論およびレッセ・フェールの経済社会観とともに、近代国家において社会理論は政治理論すなわち国家理論として展開されていった。しかし自然的秩序の具現としての国家とアトム的個人の対極配置（一元的社会相）は、種々の制度的な人間団結の小さな諸グループ（社会のあたらしい様相）の発達とともに

に、その歴史をおえる。いまや「社会的」な人間諸関係は政治的・国家的諸関係を超えて複雑多岐となり、ひとはたんなる国家対個人の問題を取りあつかう「政治理論」ではなく、制度的諸概念・諸関係を包括しうる一層ひろい「社会理論」を求めらるにいたる。それはもはやホッブズ・スペンサー的な社会的原子人ではなくて複雑な諸制度にとりまかれた一層現実的な人間を問題としなければならない。このうごきは一面では自由放任を否定する意味で全体主義的ではあるが、しかし、社会形成の多様な要素をみとめ、統一したひとつの制度や国家を否定する点では反全体主義的。多元的・民主的・反理想主義的（反絶対主義的あるいは反フイヒテール反ヘーゲル的）である。しかしその場合多元的価値判断、幸不幸の中心は、あくまで個人である。

こうしてコールはイデアリズム（ルソー、フイヒテ、ヘーゲル、マルクス、エンゲルス）における「マス・ドクトリン」をすててイギリス特有の功利主義にはくまられた「インデペンデント・ドクトリン」をあくまでまもる。たとえ他方においてかれは今日、イギリス功利主義の一面面だったレッセ・フェール——国家（単元社会）と個人（アトム）との素朴な対置——の反時代性や、フランス・ドイツにおける社会学の発生とそのアメリカにおける展開の必然性をみとめ（第二論文）、また真の功利主義がじつは労働大衆の幸福をはかる立場、またかれらの勝利を信ずる立場にほかならぬとかがえることよって一時なによりもマルクス・エンゲルスにちかずいたとはいえ、しよせん

コールはヴィクトリア女王治下の矜持たかきイギリス人の「自
助」精神への恩慕を断ちがたいようにみえる（第十三論文）。

このことはかれのチャドウィック解釈にもあらわれている。一
八三四年改正救貧法の立役者、またそのゆえに衆人惡罵のま
となつたあのエドウィン・チャドウィックが、ベンタマイトで
あつたがゆえにこそ一八三三年のイギリス最初の有効な工場法
や一八四八年の衛生法の首導の推進者たりえたのだとすれば、
コール自身もまた「チャドウィックの鼻」をもって、二十世紀
におけるイギリス社会主義の必然性をするどく嘆きわけたのだ
といえるかもしれない（cf. pp. 195—197）。

五

かれのルソー論・ユント論、人権宣言論、「マニフェスト」論
は、本書のなかではもともとブリリアントな部分であろう。ル
ソーの「社会契約論」のほん訳（エヴリマン文庫所収、コール
の序文つき）はかれの研究生活の出発点をなしていたのみなら
ず、かれの一生を通じてかわらないデモクラシーへの信念をつ
ちかかった意味でも、またその後のかれのすべての理論的な研究
にたいしてもたえず中心点をあたえていた意味でも、ルソーの
影響は重要であった。本書所収の第八論文はかれのルソー解釈
の一応の終末点とみることができるといえる。コールはルソーのうちに
たんなる国家や政府の問題ではなくて、人間諸關係一般におけ
る「共同我」の問題をとらえ、それを種々の団体における種々
の一般意志と、全社会について生ずる一箇の「一般意志」とに

區別し、後者をはじめて主権国家の「一般意志」の問題として
みだしている。

こうしてコールはルソーのうちに「統治」と「主権」との区
別を嘆きわけ、フランス革命即ち「人権宣言」の理念が国民議会
（主権の代理）をみとめることによってルソーの真意からま
たく離反したことをするどく指摘する。なるほどフランス人権
宣言はイギリス一六八八年の「権利章典」が保守的・特殊的・
反革命的・現実的であつたのに反して、「アメリカ独立宣言」
とともに個人の権利を決定的にみとめた革命的なものであつた
とはいへ、アメリカとことなつて伝統の絆にひきずられたフラ
ンスは、妥協の道をとらざるをえなかつたのである（第九論文
参照）。だが実は主権は決して代理されえない。近代巨大国家で
は代議制（統治代理）が主権代理とすりかえられ、それによつ
て全体主義の命運をたどることは不可避なのだ。近代巨大国家
にたいするコールの絶望。それに反してたいしい国民意識・同
胞感に支えられて成長しつつある弱小国家・小団体においてこ
そ国民主権・個人権の理想的な直接行使が可能となると、コー
ルは期待する。このわかかわかしい感覚、包容力は、ルソーにイ
ンスパイアされて出発して以来のかれのたゆまない思索の成果
でなければならぬ。もちろんかれの「ヴィジョン」がわかわか
かしいということは、かれの処方箋のすべてがたいしいことを
意味するものではないであらう。「コミュニケーション」によるギルド
社会主義の実験のプランが事実上かれの理想からとおいかちか

いかは、われわれがコールからまなぶべき真の課題なのではない。この点、理想主義にたいしていかに批判的であろうと、かれ自身も一個のイデアリストなのである。

ルソーによってつとに指摘されていた個人の自然権と国民主権との対立の可能性は、ベンタムやミルによつても看取されていた。そこにイギリス功利主義者たちが自然権を棄てて「最大多数の最大幸福」原理を信奉するにいたつた理由がある。この功利主義原理を経済・政治に有効に適用する手段としてようやくはじめて、ベンタムはレッセ・フェールと代議民主制を是認するにいたつたのにすぎない。だから功利主義そのものもまた、論理的にいつて、フランス人権宣言思想におとらず全体主義的傾向をもつ。そのような民主的エタティスム主張の傾向を全然もたず、純粹單純に個人主義的だつたのはアメリカ独立宣言であつた。——だがそれにもかかわらずコールはヨーロッパにおける個人の自由・幸福・権利の尊重と拡大の伝統が真実には功利主義に発していることをみとめる。『なぜなら、ベンタムおよびその同調者が主張したのは、本当に大切なのはできるだけ多数のひとびとが、できるだけ幸福になるということであつたが、しかも幸福とは本質的に個人の状態なのであつて、起生する事件ごとに個人におうじてことなるものであり、それは個人の情緒的な存在のうちに、またそのために、のほかは存しえないからである。』(p.15)カントは「幸福」をそれが主観的であるがゆえに放棄したが、功利主義者たちは、それがまさに主観的であるから

こそ、これをまもるのだ。コールにとつては政府も社会主義も結局は手段であるにすぎない。いな、功利主義や社会主義のみではない。民主主義そのものすら、「群衆」とか「祖国」とかカリスマ的「指導者」とか「階級」とかを個人の上に据えることによつて個人の幸福を犠牲にするという可能性をふくむかぎり、十分警戒されねばならない。すべてはヨーロッパの貴重な伝統——個人の幸福・自由の尊厳——をまもるために。

そしてまたこの点がコールのオージェンスト・コント批判の核心にはかならない(第十一論文)。いうまでもなくコントの功績はサン・シモンとともに実証的社会理論の建設者たるところにあつた。しかし前期コントにおける方法論上の「三段階」思想および自然秩序の思想から後期コントにおけるカトリック的組織に立つ「人間宗教」の展開にいたるまで、コント思想にとつて致命的であつたのは自由認識・個人認識の欠如であつた。『コントの大弱点は、「人間」を研究するにあつて、個々の男女を忘却するだけでなく、特殊な諸社会や社会的模様の種々のありかたをも忘却する傾向があつたということである。』(p.15)だからこそフランスは前期コントにまなんでデュルケム以下の社会学・人類学の展開をみせたのにたいして、功利主義・個人主義の國イギリスは後期コントを一時熱狂的に受け入れたとはいへ、まもなくかれを前期についてまで棄ててしまつたのであつた。『コントの思想は、たぶんイグナチウス・ロヨラのものあたりをのぞけば、かつて人間の頭脳のかんがえだしたも

とも完全な靈界的・俗界的専制組織』であり『ひとたびひとが思想上自由の価値・個人の価値を見うしなつたばあいどんなことがおこるかについで、社会・政府思想家への記念すべきいましめ』となるものだとのJ・S・ミルの酷評（「自伝」）は、そのままコールによって継承されている。

六

このような基調は「共産党宣言」評価においてもかわるところはない。「宣言」が学問的に精緻な構成を欠くとはいへ、そのほかの諸宣言・綱領にくらべてたんなる古典たるにとどまらず今日なおひとびとの実際の活動指針として生命をたもち、いな、後進国においてむしろますます意味を増しつつあるのは、それが「階級斗争」理念を中心としたたゞしい史的洞察を、たんなる教義問答ではなくひとつの「^{トラムベイト・コール}檄文」のなかに吐露しているからであり、たとえ中産階級の動向やプロレタリアートの絶対的貧困や恐慌の累積的激化などにかんしてその後の先進資本主義国における情勢変化と修正主義の成長を予測できなかったとはいへ、そういうあらゆる仮定の不成立をべつとしても、なおマルクス主義の本領——全世界の労働者階級の勝利の必然性の明示——はゆるがすことをえない。「宣言」の生命はじつにこの点をしめしたところにあつた。

ところで「宣言」は直接にはドイツからの追放者たちのノスタルジアと母国改革への熱情との所産であつた。革命への過大

な期待はそこから生まれた。しかも「宣言」は四八年革命にはほとんど影響をあたえなかつた。世界的視点にたつとはいへ、目標は大陸革命（とりわけ独・仏）にあつた。だがしかし第一に革命は新共産社会建設の第一歩にすぎない。それは労働者階級のもっとも進歩的な部分によって、独立の党をつくることによってのみ遂行可能だとはいへ、一党国家も急激な一歩の社会改造もマルクスの意図したところではない。また第二に真の労働者階級の視点はあくまで個々の幸福・自由・独立を核心とするものでなくてはならない。『結局「宣言」の精髓は、それが全世界の労働者階級にむかつて、革命と自己信頼の福音を説いたということ、こうしてきみらの正義こそあらゆる国々においてひとつのものであり、きみらの解放はきみら自身の仕事でなければならず、しかもそのばあい史的進化のちからはきみらの味方となるだろう、とかれらにつげたということ、これである。』（p.179）

みぎによつてもあきらかなとおり、英米における「その後の情勢の変化」にたいするコールの樂觀的期待感は、ハロルド・ラスキのばあいにもそうだつたように、かれをして公式マルクス主義からますますおざからしめる。一方においてシュムペーターを『まったくユブデン的』だときめつけるかれは（シュムペーター「帝國主義と社会諸階級」の英訳書〔P・M・スウィーシー編、ハインツ・ノーデン訳、一九五一年〕にたいするかれの書評、Economic Journal, Vol. LXII, March 1952, pp.

177-180.を参照)、他方においてマルクスレーニン主義に
けるヘーゲルの系譜を嫌悪する。イギリス帝国主義をはげしく
弾劾しながらも、コールはしょせんあくまでイギリス人らしい
みちをあゆむほかないうである。しかもかれは民衆とともに
——パースナリティをうしなつた灰色の個人の集合としての
「群衆」ではなくあくまで自助の精神に燃える労働者たちの幸
福とともに、あゆむ。『わたくしは民衆とともににはじめる。多種
多様な社会関係のうちにある多数人とともに。そうして民衆と
ともにおえる。』(ひとり)ではなくて多数人とともに。「ムーサ
イたちよ、いざわれらはゼウス神よりはじめん。しかしてなん
じらはゼウス神におわれよ。』(テオクリトス)——だがわたたく
しのゼウスとは民衆なのだ。』(p. 9) 個人主義と社会主義と
の統合の場としてのイギリス労働大家へのこの理解と情熱こそ
が、かれの老いてけうしておとろえることのない著述活動をさ
さえているにちがいない。

それなら最後に、個人主義者コールはコスモポリタンたりう
るであろうか。コスモポリタニズムがソシアル・アトミズムを
意味するとすれば、もちろん答えは、いな、である。だがアダ
ム・スミスにおいてすらそうであつたように、問題はもっと複
雑である。第十四論文はこの点にかんして、近代国民(民族)意
識の起源について、経済的・政治的な地盤をみとめつつも結局
それらとは別箇の共同体感情——宗教・文化的伝統・言語にか
んする下からの、自立要求という点にこれをみいだし、これがデ

モクラシー・個人主義の育成にやくだつかがぎり育成されなけれ
ばならないことをのべている。一方ではこのような民族意識か
ら巨大国家が浮きあがり乖離していくことにたいする失望。他
方ではかえつて「インフュアリア・ステイト」における民族意
識やさらに小さな共同体的諸グループにおける連帯意識こそ、
「共同体」と「個人」とをつなぐ社会的なきずなとなる。国民
主権の独立は、そのかぎりにおいてははじめて必要となる。その
ばあいの偉大な政治家とは、それら諸グループのなかで民衆と
ともににはたらいっている「自然の指導者」(p. 95)のことにはか
ならない。これを本末顛倒して、国民主権の政治的確立だけが
クロトズ・アップされ、ボスになりたがる小人政治家ども(「ヨ
ロッパに從たらんよりはセルボニス沼の主たらん」ことをも
とめる連中)によつてあやつられるようなことがあつてはなら
ない。——そしてこれはまたかれの国家論の最終答案でもあ
る。

コールのこの民族意識論はわがくにおけるさいきんの歴史
民族問題の展開のしかたにかんしても、たしかにひとつのふ
かい暗示を投じている。歴史における民族という問題提起のし
かたは、そのままではやはり民族概念を固定化する危険をふく
んでいる。民族意識そのものをひとつの歴史的・現在のなもの
とみるというコールの考えかたは注目されてよいであろう。

コールがはたしてコルホーズ方能主義者なのかどうかはべつ
として、ともかくかれはコスモポリタンでないのと同様にけつ

してヘトゲル非ボザンケ主義者でもない。だからといってけっしてその点にはかれの社会理論の矛盾はない。このことについての誤解はひさしくわがくに於けるよりただしいコトル評価をおくらせてきたといえるであろう。むしろかれに於ける本当のアボリアは、かれの社会理論の限界が、このような後進弱小国民や労働大衆へのふかい同感にもかかわらず、結果においては先進資本制国家の社会改革——熟練労働者の立場——の限界にひとしからざるをえないという点に、あるといわねばならないであろう。

ともあれ、コトルはもうゆるぎない巨木である。不当に顛倒されていた序列をただし、コトルのためにふかい評価を準備することができるのは、これからである。

——一九五二・七・一〇——